

重監房の実寸大部分再現と出土遺物コーナーの展示が変わりました。



【更に臨場感が増した房内】



【南京錠の質感が感じられる】

当館の第1展示室では、特別病室（重監房）を実寸大で部分再現し、かつてハンセン病患者を収監した房の内部をご見学いただけるようになっていますが、これまで房の中には証言に基づいて再現した布団が置いてあるだけでした。このたび夏模様と冬模様の2つある房のうち、夏の房に収監者に見立てた人形を配置して、より臨場感を感じていただけるように工夫しました。

また、第2展示室の発掘調査報告コーナーの出土遺物展示のうち、これまで実物大の写真のみ展示しておりました古い南京錠について、立体的にご覧いただけるよう、同じタイプの模造品を展示することといたしました。写真と違って重厚感があり、ご見学いただく皆様には南京錠特有の金属の厚みや硬さをイメージし易くなりました。

更に、昭和22年9月21日に撮影された本物の特別病室（重監房）内部の様子を伝える日本ニュースの試聴画面も年表上部に大型のモニターを追加して、よりご覧いただき易く改良いたしました。

7月1日から休館日が毎週月曜日だけになりました。

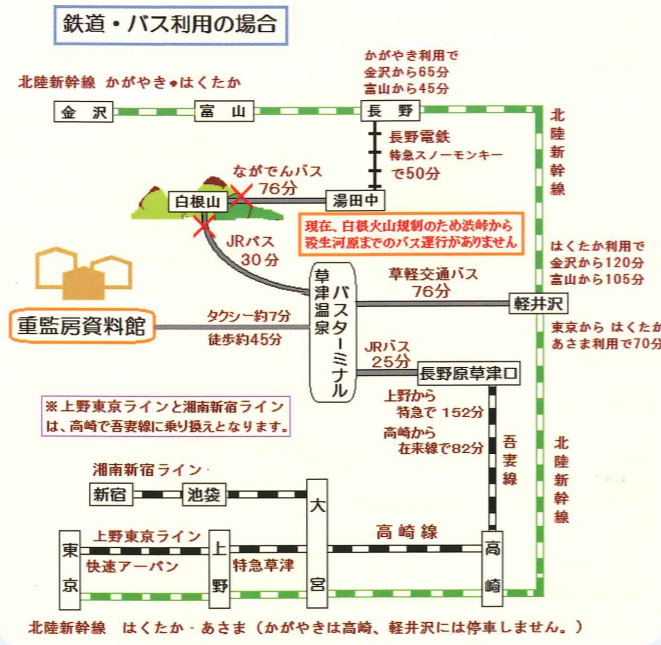
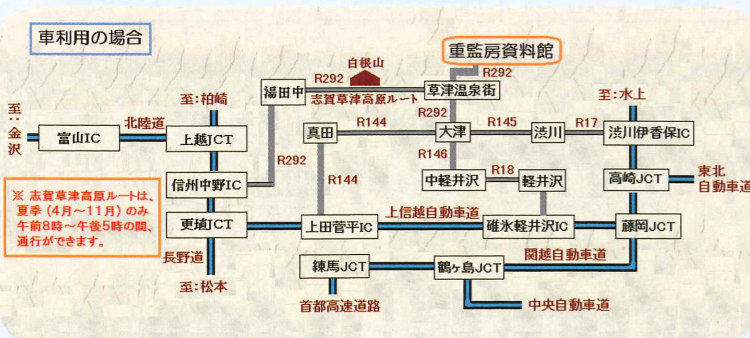
これまで、フルオープン期間は月曜日と火曜日、団体専用期間は土曜日と日曜日の毎週2回を休館日としておりましたが、平成28年7月1日以降の休館日が原則として毎週月曜日1回のみとなりました。（月曜日が国民の祝日にあたる場合は、翌日休館いたします。）

ご利用案内・アクセス

入館料…無料

※個人見学は4月26日から11月14日の期間となりますのでご承知おください。

区分	フルオープン期間（4月26日～11月14日）	団体専用期間（11月15日～4月25日）
受付対象	個人及び団体	団体・学校 予約のみ
開館時間	午前9時30分～午後4時00分 （最終入館午後3時30分）	午前10時00分～午後3時30分 （最終入館午後3時00分）
休館日	毎週月曜日（祝日の場合は翌日）・国民の祝日・年末年始・館内整理日	



重監房資料館だより「くりう」第8号【季刊】

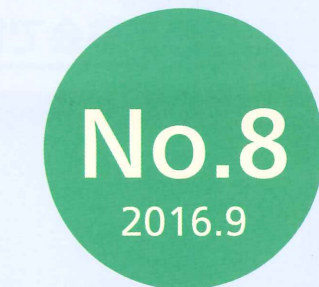
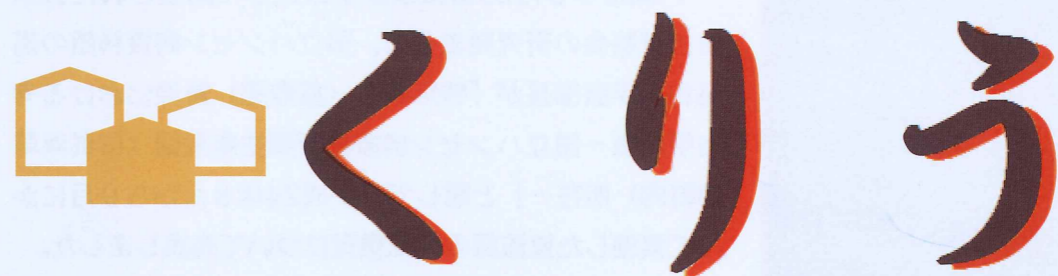
発行日：平成28年（2016年）9月1日／企画・編集・発行：重監房資料館

〒377-1711 群馬県吾妻郡草津町草津白根464-1533 TEL：0279-88-1550 URL：http://sjpm.hansen-dis.jp/

重監房資料館はハンセン病をめぐる差別と偏見の解消を目指して国（厚生労働省）が設置した国立の資料館で入館は無料です。



重監房資料館だより



KURIU

無らい県運動と隔離の果てに・楽泉園の子供時代 —らい予防法廃止20年にあたって—



重監房資料館語り部
栗生楽泉園 入所者
岸 従一

私が、昭和24年に父親と共に栗生楽泉園に入所した頃の様子をお話しします。ある日我が家に保健所の人達が来て診察し、父親と私は「らい（ハンセン病）」と診断されました。

次の日の夕方、父は死を決心していたらしく、家の前にある溜め池の縁で私の体に石を抱かせて荒縄で縛りました。大声を出して泣き叫ぶのを聞きつけた母は、私の元へ飛んできてすぐ縄を解きほどいてくれました。父は何も言わず、家の中に入って行きました。当時、私は11歳でしたが、今でもその光景を忘れることが出来ません。その後、すぐに私と父親は幌付トラックの荷台に揺られて草津にある国立療養所栗生楽泉園に連れて来られました。

私達が入所して間もなく、保健所の人達が来て家の隅々を床下まで消毒し、私達が身に着けていた衣類と布団を近くの河原に持って行って焼いたそうです。こうした「無らい県運動」と「強制隔離」によって、私達患者や家族は村八分の苦しみに立たされたのです。

入所する時、私達が持って来た衣類は全て消毒され、1週間ほど収容病棟に入れられた後、親子と言う事で夫婦舎に入居しました。そこは1棟に4畳半の板張りの部屋が6つ連なった長屋で、擦れ違いもやつの長廊下がありました。部屋の隅には小さな炉が切っあって、そこで煮炊きをしたりしました。炭と薪は配給制で、水道は長屋4棟に1本の蛇口が外にありました。冬は毎日の様に吹雪になり、天井裏に雪が吹き込んで凍りました。その雪がお昼頃になると部屋の暖かさで解け、雨漏りの様に落ちてくるので天井の雪下ろしをしました。それも午後3時頃になると気温が下がって自然と凍るので雨漏りもしなくなるといった繰り返しの生活が続きました。

園内には子供の患者が学ぶ栗生望学園（通称「望学校」）があり、私もそこに通う様になりました。小学生1教室、中学生1教室に分かれて勉強し、入所する前に教師をしていた人など子供好きな入所者が勉強を教えてくださいました。

ちょうど治らい薬のプロミン注射が出た頃で、授業の途中で10時半頃になると「先生、注射行って来ます。」と言って教室を抜け出し、11時半近くに注射が終わると「もう、学校はよすべえ。」なんつって学校へ行かずに昼飯を食べ、また1時頃学校へ行くとするような生活でした。昭和29年の4月から望学校は草津小・中学校の分校となり、本校から2人の教師が来ましたが、いつもマスクと軍手をして白衣姿で授業をし、1年で辞めて行ってしまいました。

卒業してから「何か園の作業をしなきゃならん。」と言う事で売店の店員になりました。作業賃は1日働いて30円でしたが園内の作業はどこでも同じくらいだったと思います。昭和34年に食搬車が入ったので助手になり、配食と残飯を集めて豚舎に運ぶ作業に就きました。義務看護と言って、時々不自由者棟に行かされましたが、盲人や義足など重度の障害を持つ人達が1部屋に4～5人居ました。当番日は朝5時半位に起きてその舎に行き、お湯を沸かしたり皆の箱膳に食器を並べて盛り付けした後、不自由な人達の食事が終わるのを待つ間「自分もいつかはこうなるかも知れない。」と思うと不安でたまりませんでした。

辛いプロミン注射のおかげで大事に至らず、その後の月日の中で運転免許を取ったり労務外出をしたりすることも出来ました。今は「元患者」として元気に暮らしています。

日本考古学協会で重監房発掘調査について報告しました。



【重監房跡の発掘調査について発表する国立ハンセン病資料館の黒尾学芸部長】

平成28年5月29日に東京学芸大学で開催された日本考古学協会の研究発表会で、国立ハンセン病資料館の黒尾和久学芸部長が「特別病室（重監房）跡地における考古学調査－国立ハンセン病療養所栗生楽泉園（群馬県草津町内）所在－」と題して、平成24年8月から9月にかけて実施した重監房の発掘調査について発表しました。

戦後間もなく非人道性が国会で取り上げられた特別病室（重監房）は、国立療養所内の施設として建設されているが、設計図等の基礎資料がまったく残されていないことが、鮮明な外観写真さえ1枚も伝わっていない状況などから、70年ほど前に実在した施設であり

ながら一次資料があまりに乏しく、再現計画が行き詰まっていた実態について説明しました。

更に、復元までは追い込めなくても、再現といえる程度の確からしさを整えるために、建築部材、建築工法に関する物証を得る目的で、跡地における考古学調査を実施した結果、多くの出土品とともに象徴的な遺物として大（入り口大扉用）・中（通路扉用）・小（各房用）の南京錠が5点出土したことによって、「特別病室」という名称をもつものの、その実態が監禁施設であることを示す動かぬ証拠を見いだすという目的が達成されたことなどが報告されました。

日本ハンセン病学会で跡地の地層調査について発表しました。



【特別病室（重監房）跡地の敷地北側斜面における地層断面調査の様子】

重監房資料館の北原主任学芸員は、平成28年6月7日に草津町で開催された第89回日本ハンセン病学会学術大会において特別病室（重監房）跡地で実施した地層調査について発表しました。この調査は、第1次発掘調査において認められた敷地南面のすべり現象が重監房の倒壊に与えた影響の有無、及びすべりの原因を特定する事である。いわゆる「手抜き」が無かったか検証することを目的として行いました。

重監房は、昭和22年10月に一松厚生大臣（当時）が発出した使用禁止命令以降、永年にわたって敷地内に放置され、昭和23年から遅くとも昭和30年までの間に倒壊したとされています。倒壊の原因は諸説ありますが、少なくとも平成24年8月から9月にかけて国立ハン

セン病資料館の黒尾学芸部長が行った第1次発掘調査の結果からは、正式な解体工事をした痕跡はうかがえませんでした。

今回の調査では、本来の斜面と盛土・造成された表土に顕著な不連続性が認められました。また、重監房の敷地と接する周囲の山林の斜面を掘削して地層断面を精査したところ、約1万5千年前の浅間山大噴火によるものとみられる厚い層「As-k」を確認しました。この結果から、複数の性質の異なる土の混合物で造成された表土にすべり現象を生じたことが強く示唆されたことなどを報告しました。

群馬県庁のハンセン病パネル展に参加しました。



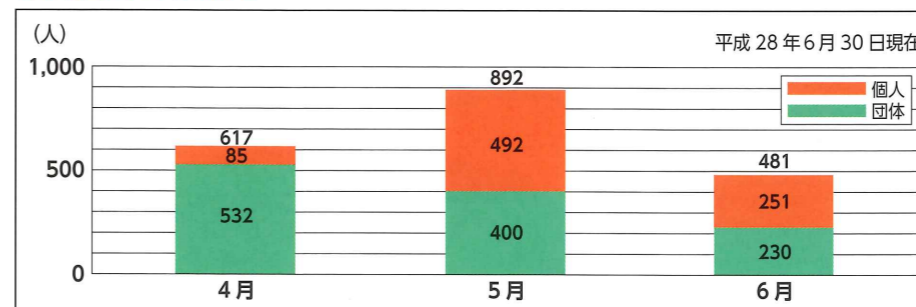
【来場者に展示の解説をする当館学芸員】

今年は、ハンセン病の元患者や家族の皆さんを永年にわたり苦しめて来た「らい予防法」が廃止されて20年になります。群馬県では毎年6月22日の「らい予防法による被害者の名誉回復及び追悼の日」に合わせて、ハンセン病をめぐる差別と偏見の解消を目指す普及啓発事業としてハンセン病パネル展を開催しています。予防法廃止20周年の今年で第8回になりますが、群馬県保健予防課が主体となって県庁1階の県民ホールで行われた同展には、国立ハンセン病資料館所蔵の写真パネルのほか、国立療養所栗生楽泉園社会交流会館が所蔵する、かつて栗生楽泉園の入所者が実際に使っていた生活用具なども初

めて展示され、当館の学芸員が会場を訪れた一般見学者の求めに応じて解説をしました。

この催しは、6月21日から23日まで開かれましたが、期間中多くの人が見学を訪れ、来場者からは「昭和16年、学校の担任が見えなくなりました。その後、ある療養所の住所で手紙が来ました。療養所の内容を知り、ただ涙が出るばかりです。」とか「昭和18年頃、隣組の人がハンセン病で隔離され、住んでいた家や敷地に雪が降ったように石灰がまかれていたのを思い出しました。」などといった体験談のほか、「とても良い企画だと思います。公民館など各地で展示して欲しいです。」とか「私たちの生き方にも、深い自省と未来への取組みを教えてください。」などのご意見が寄せられていました。

【来館者の推移】



平成28年度入館者数	
延べ	1,990人
一日平均	28.0人
開館以来延べ	16,408人

ホームページアクセス数	
平成28年度	12,543回
開館以来延べ	71,163回

お客様の声（来館者アンケートより抜粋）

- ◎人間なのに、さべつされ、ひどいあつかいをされて、かわいそうと思った。
(茨城県、9歳・小学生、女性)
- ◎人が人として扱われなかった歴史に悲しみを覚えると同時に、病に対する無知という罪に怒りを感じる。
(埼玉県、56歳・会社員、男性)
- ◎日本人が自らおとした差別を大きく受け止めたと思います。
(長野県、45歳・会社員、女性)
- ◎あらためて、無知に関する恐怖を感じた。今後、このようなことを忘れないようにして行かなければいけない。
(東京都、23歳・大学生、男性)
- ◎再現なのに、とても「こわい」実感がありました。いつの世もある一定の特に弱っている人を排除し苦しめることからはなかなか解放されない人間の罪を感じました。
(大阪府、53歳・大学教員、女性)
- ◎余り非人間的扱いだったことを知って声も出ない。しかし、知らなければそこからの第一歩も始まらない。
(福島県、65歳・無職、男性)

【この他にも、多くの皆様からご感想をお寄せ頂きました。有難うございました。】